特集

過去から未来へと繋がる文理融合の被服学
—被服学の変遷・これからの被服教育・生活の科学を学ぶ被服学—
井上雅人　末弘由佳理　澤渡千枝　古濱裕樹　2

過去から未来へと繋がる文理融合の被服学

― 被服学の変遷・これからの被服教育・生活の科学を学ぶ被服学 ―

被服はヒトの健康や安全に影響するため，これまでも科学的に研究がされてきました。被服を着用せずに，ヒトは快適な生活を過ごすことができません。健康で安全で快適な被服を科学的に学び，デザインできることが，本学科の被服学コースの目標です。その原点である被服学の変遷と，被服教育や本学科のこれからについて，３人の研究者と語り合いました。

井上雅人　×　末弘由佳理　×　澤渡千枝　×　古濱裕樹（コーディネーター）

＊教員の詳細は，本誌の教員プロフィール参照　（本文編集　竹本由美子）

――――コロナ禍のためオンラインでの対談となりましたが，最初に生活史を専門とされる井上雅人准教授に，今に至る被服学の変遷をお話しいただきます。

過去と現在の「被服学」の相違

古濱　まず，歴史的にみた「被服学」の成り立ちについてお聞かせください。

井上　以前，『洋服と日本人』という本に書いたのですが，アメリカや中国との戦争によって物資が不足していた時代に，「被服資源の活用」ということが言われました。「被服資源」とは，被服そのものと，被服を作るための資源（糸や布，染料など）のことだそうです。戦争が総力戦となり老若男女が労働に携わると「和服で戦争はできない」と言われ，資源がない中でも動作がしやすく機能性を備えた服装が求められました。そこで生まれたのが「国民服」です。その制定に関わった人物の１人が小川安朗氏であり，彼は「被服学」を「Clothology」（Cloth：服＋logy：論理）として提唱しました。

古濱　「被服学」を小川氏が初めて用いたということですか？

井上　「被服学」という言葉は，すでに使用されてはいました。戦前の小学校の家庭科教育で「被服学」という言葉を確認することができます。ただ，当時はまだ女子大学はなく，高等女学校で裁縫教育のみが取り入れられていたという状況です。戦後に短期大学や女子大学が設立され「家政学」ができ「被服学科」が設置され・・・といった流れです。その頃「被服学」を英訳して，現在の学問に位置づけたひとりが小川氏ですが，その後「Clothology」という言葉は普及しなかったようです。現在，「被服学科」を設置している大学は首都圏では多いようですが，関西は少ないですね。

古濱　確かにそうです。「被服学科」は関東の数大学が設置していますが，関西からはなくなってしまいました。

井上　それらの大学・学科では「被服学」がなぜできたかを詳しく説明していません。戦前は裁縫教育が中心で，衣服の生産から消費までの流れでいうと，いわゆる「川下」に近い「家政」に属する教育でした。一方，本学科の「被服学」では繊維材料や染色，品質管理など，「川上」･「川中」に位置する被服の「生産」も学びます。このように，戦前の「裁縫教育」と本学科の「被服学」の領域は異なっています。

図１　著書と共に語る井上雅人准教授

文理融合の「被服学」

井上　最近私が復刻した雑誌『国民服・衣服研究』でも，詳しく解説しているのですが，日本の「被服学」は，「国民服」制定が発端となり，高等女学校や洋裁学校で裁縫教育に関わる教員と，小川氏などの陸軍関係者が合流して，戦後に形成されました。実は，小川氏は「被服学」が文理融合であると述べています。戦時中に北方や南方へ侵攻した際に，各地域で適した被服を着用することが戦力や統治にも大きく影響するため，政府の方針として被服環境や文化を研究することが非常に重要だったことや，東亜の盟主を明言する国粋色の強い日本が，合理的だからと言って，これまでの和服から西洋の服に容易に転換することに躊躇したことなどが，背景にはあります。そのため，作り方は全く同じなのに「洋服」とは言わず，「国民服」「日本服」と別名を用いたりもしました。このように，国策として服を制定した文化的背景と，環境に適した服を研究するという科学的態度の融合が「被服学」の発端でした。

その後，国内の需要や洋装化，輸出の問題が生じたことで「被服学」を取り巻く状況も変化しました。幕末の開国後は絹，大正から昭和には綿，輸出や内需拡大のため「テトロン」などの化学繊維と，日本の工業国化や経済大国化は大きく関わってきました。絹など，今は国内生産が非常に少なく，輸出大国だったとはとても思えませんが。

戦後は輸出産業がとても重要になり80年代には世界的なファッションデザイナーもたくさん輩出しましたが，ファッション業界における国策は空振りばかりで，現在国内で着られるメイドインジャパンの衣服は１～2%程度しかありません。このように，被服学が成立した時代から被服が置かれた状況や国策

はかなり変わりましたが，「被服学」だけが置き去りになっています。ただ，再び国家規模でいかに環境をコントロールにするかが議論され，無駄な資源を使わない，エシカル，エコロジカル，サスティナブルが注目されています。1着の服を大切に着ようという考え方は，全く戦争中と同じとも言えます。テクニカルであることと，戦時中のように統制することは紙一重ですが。

今はジェンダーの問題から水着なども男女の区別を無くそうと，新しく仕切り直しをしようとしています。戦時の国民服は，宮中でも日常生活でも着ることができるような，公私の区別を消滅させた服でした。私たちも遠隔で対談していますが，このようにプライベートとパブリックの領域が取り払われて新しく仕切り直しがされている現状は，戦時ととても似ています。

「被服学」と「家政学」

井上　「被服学」は「家政学」ではありません。国家や社会をどのように文化的，経済的に，特に資源などを中心にコントロールしていくのか，その目的は戦争や，生活を合理化して貧困を無くすことなど，時の政府によって異なります。今であれば脱炭素社会が大きな目標ですが，その中で被服の領域でどのように社会全体を導いていくのかを考えるのが「被服学」です。

古濱　家政学に被服の領域が取り込まれたのは，文理融合がその分野に適合しやすかったということでしょうか。

井上　単純に，「家政学」の「裁縫教育」を担っていた高等女学校の先生達が「被服学」分野を担当し，それが戦後から現在まで続いてきたのでしょう。「家政学」は直訳するとHome Politics（家の政治学）であり，「家」というのは近代以前には一種の経営団体でもあったのですが，近代になるとその経営部分が「企業」という形態に分離し，残った部分が今の「家庭」であり，「家政学」（Home Economics，Domestic Science）の対象です。そこで「家政学」は科学を取り込んでいきます。例えば，レシピによる料理は，実験で再現性を検証しているのと同じです。「被服学」も同様に科学を取り込んでいきましたが，そもそも対象が「家庭」とは言えません。

古濱　「被服学」と「家政学」は別々の学びとしてこれからも存在すべきということでしょうか。

井上　そうです。ただ例えば，生産の面を考えても，絹を得るためには蚕や桑を育てる場所や人が必要で，糸や布にするにも機械や場所や人が必要になります。服以外のことが非常に重要なのに，「被服」という言葉で狭く捉えられてしまっています。もっと大きな生産システムを示しているはずです。消費についても同様のことが言えます。

古濱　「被服」をさらに大きく捉えるのであれば「衣生活」になるのでしょうか？

井上　「被服学」しか適した言葉はないのでしょうが，背景をしっかり教える必要があります。ジェンダーの問題も服だけではなく社会問題でもあり，その中で服を提案することによる効果を解っていないと意味がありません。「被服学」はとても奥深い学問ですが，それを伝えきれていません。

古濱　個々の専門分野の教員では伝えきれない広範囲な学問ということですね。

井上　今はSDGsと共に被服も注目されていますので，この機会にどのような問題があるのかを整理すべきです。現代の社会問題の最先端が「被服」に集まっています。労働問題，生産方法，貧富の格差やジェンダーなど社会問題が集約されている学問です。というのも，人の形を作るものが「被服」だから当然なのです。人間は能力を広げるために様々な道具を作りましたが，その道具を使う身体の形や在り方を考えるのが「被服学」です。戦時中は戦争をできる身体にするための「被服学」が重要でした。今は今で，様々な問題を解決するための身体を考える「被服学」が求められています。そういった前提で，次世代の「被服学」の研究者を育てていく必要があります。

古濱　これほど面白く多くの可能性を秘めている学問を，ますます発展させていく必要がありますね。

明確なコンセプトと価値観を持つこと

古濱　日本の被服やファッション産業，アパレル産業は今後どうなるのでしょうか？

井上　国内向けと海外向けの2つの方向性で考える必要があります。国内向けは小規模な企業ほど好調ですね。InstagramやYouTubeなど小規模なマスメディアが影響を与えていますが，趣味やライフスタイル提案が明確なブランドは顧客を集めています。重要なのは，消費者が生産側として参加できるかです。ブランドを立ち上げる側が明確なコンセプトと価値観を持ち，消費者を仲間として参加させることができるかが重要です。

海外向けは，日本がアジアの中でファッションを発信する立場に立てるかどうかです。日本では，ファッションショーなどがエンターテインメントとしてのみ捉えられていて，売買や情報発信の場であることが理解されていないために，うまく作用していません。

学生も，これからのファッションやアパレル産業の未来を自分の立場を客観的に捉えながら考えてもらいたいです。

古濱　昔のように夢を持ちにくくなっているのでしょうか。

井上　夢が身近になっています。大きな夢は難しくても，小さな夢は実現できる世の中になってきました。今は誰でも身近なアイドルになれる可能性があるように，ファッションを発信する人も身近に存在しています。

過去に私が支援していたアウトドアブランドは，今でも順調に経営されています。もはや日用品の形はほぼ決まっているので，オリジナリティを持たせるよう改良を繰り返していけば，良いものや売れるものが提供できる時代です。縫製ができなくてもデザイナーにはなれるので，コンセプトをしっかり考えることができるか，問題を発見し良いものをクリエイトできるか，今はその能力が求められています。ファッションを服，ジュエリーや帽子，靴，化粧だけではなく，これまでファッションの

分野と考えられていなかった物や情報も含めて考え，人の姿をトータルで捉えることも必要でしょう。

――次は，本学科のアパレルコースで被服構成学や実習を教授されている末弘由佳理准教授に，被服学コースとの関係性や家庭科教育についてお話しいただきます。

製作に関わるからこそ必要な繊維材料の知識

古濱　被服学コースとアパレルコースの関係性について先生のお考えをお聞かせください。

末弘　例えばアパレルの品質を検査する職種の人達が，アパレルの製図や縫製ができなくてもそれほど問題にはなりませんが，アパレルデザイナーやパタンナーにとって繊維材料の知識は重要になります。パターンが同じでも生地の種類でかなり衣服のフォルムが変わるので，繊維材料の知識がなくては意図したデザインの衣服を作れません。衣服だけでなく鞄や靴など繊維製品の製作に関わる人こそ，繊維材料の知識は重要だと言えます。そういった意味で，デザインが中心のアパレルコースと繊維材料を学ぶ被服学コースは同じ大きな領域の中に存在します。ただ，現在は別々のコースになったことで，2つの関係性が離れてしまったような気がします。

図２　繊維材料とアパレルの関係について語る末弘由佳理准教授

古濱　学生の認識も以前より離れてしまいましたか。

末弘　もともと学生が認識していた距離よりも，さらに遠くなった気がします。服が好きな学生はアパレルコースでの学びを希望しますが，コースに分かれる以前は繊維材料の知識を修得する科目も履修し，双方の距離を感じることなく学んでいました。

古濱　別のコースだから学ばなくて良いという認識が生まれやすいと言うことですね。

末弘　基本的にはすべて学んで欲しいです。各コースの特徴を際立たせるために別々のコースを設置しましたが，一連の中ですべてを学ぶことが本当の理解に繋がります。

古濱　アパレルの製作やデザインなどクリエイティブな分野を目指す人ほど，被服学コースの学びは重要ということですね。一方で，コース分けされたことで，被服学コースの内容はアパレル以外の分野とも繋がりを持つことになりました。

末弘　そうです。被服学コースは，アイテムになっていない布や材料が学びの対象になるので，アパレルだけでなくインテリアや環境など他の分野と組み合わせた学びに派生することの方が自然です。以前よりも学びが広がったと言えます。

繊維材料を考えて衣服をデザインする

古濱　学生に対してどのような展望や願望をお持ちでしょうか？

末弘　私はアパレルコースの授業を担当していますが，被服材料に関することも研究しています。アパレル CAD に関する教育的願望は，自分でデザインをして製図し，着装してシミュレーションするだけでなく，異なる生地によるフォルムの変化を学べるようにすることで，レベルの高いアパレル CAD 教育を提供したいと考えています。このように応用できるようになるためには，やはり繊維材料の知識は不可欠です。実際に使用する生地の組成や特性によってフォルムは変化します。繊維材料がどのように影響を与えるのかを知ることができれば，学生もきっと楽しいと思います。

衣服製作時，プリーツが維持できるスカートを作りたい場合に，どのような生地が良いか学生から質問を受けます。これが良いという決まった答えはありませんが，布の回復性についての知識があればある程度は定まってくるはずです。ドレープ性についても同じような質問をされます。このような布の物性については，実際に折り目を付けてどの程度回復するか，手に持って垂らすことでどのようなドレープ形状になるか，実際に手を動かして確認するよう指導し，自分の思いどおりの衣服をデザインしたいのであれば，繊維材料に関する知識が必要であることを認識させています。

古濱　繊維材料についても１年次の段階で学ぶことが重要になり，そのうえで２年次，３年次の実習にも応用できれば，理想とする授業も可能ですね。研究なさっている被服材料の風合いとの関係性についてはどのように考えていらっしゃいますか？

末弘　自身の教育分野と研究分野が異なることについては悩んでいて，学生にとっても良くないのかもしれません。今回お話をするにあたり，改めて現状に辿り着いた自分のことを振り返ってみました。私自身は「布」に興味を持ったのが最初で，父が杞柳細工に関わる仕事をしていたこともあって，その製品に使用する布の反物がたくさんあるのが当たり前の日常でした。

古濱　杞柳細工と言えば，豊岡の伝統産業ですね。

末弘　そうです。端をミシン掛けした布を籠の内側に用いており，そのような作業に日常的に接していて，服や鞄などのアイテムや，何かを作ることも好きでした。例えば，姉のリュックと同じものを作るためにパターンを製図し，自分の好きな布で作るといったこともしていました。その時に，どのような生地で作ればどのようなフォルムに仕上がるのかを意識していたことを思い出しました。この生地では薄すぎてリュックとしては成り立たないなといったことを考えることが好きでした。あと，「得意」と「好き」をとても大事にしています。大学進学の際も，「得意」なことを４年間続けるよりも「好き」なことを続ける方が楽しいからと家庭科教育を選択しました。「好き」ではない学問は義務になってしまい，興味が湧いてきません。「好き」であれば知りたいという気持ちが強くなり，楽しいと感じます。15 回の授業では，教員からはその分野のことを何百分の１くらいしか伝えることができませんが，授業を通して好きで楽しいと感じてもらえれば，自分で関連する本を 100 冊読むとか，パターンをさらにたくさん描くとか，知識や技術を伸ばすことに繋がります。

モノをつくる人や過程を学ぶ家庭科教育

古濱　教職課程の資格指導も担当なさっていますが，昨今の家庭科教育や被服教育の現状をどのように感じていますか？

末弘　家庭科教員が教える領域はかなり広いのですが，教育課程を修得できる大学は家政系が中心になります。そのため被服系や食物系の専門教員が多くなり，ほとんどの家庭科教員が専門外である住居学の授業展開に困っています。本学科では1年次より住居や建築，環境，インテリアなどの分野も学んでいる学生が多く，それらに詳しい家庭科教員は希少です。

古濱　家庭科教育の現場では，環境やジェンダーなど新しい問題も取り上げられています。今後の家庭科教育や被服教育の未来についてもお聞かせください。

末弘　文科省は，小中高を一貫教育のように考えている傾向があります。そのような教育方針で，家庭科教育が軽視されている現状は完全に時代の流れが影響していると言えます。

今の80歳代の人達にとって，当時の家庭科教育は非常に重要でした。着るものが無い時代だったため，ほとんどの人が自分で服を作ることができます。一方，70歳前半以降の人はほとんどの人が服を作れません。さらに下の世代ではミシンを持っていないことが当たり前です。そうなると，家庭科教育に被服製作が必要ではないという考え方も出てきて当然です。ただ，文科省は男女共修の家庭科教育の単位数を減らしましたが，存続はさせています。その本意を私は知り得ませんが，私の立場からすると単位数を減らすことに疑問を感じながらも，そこには何か理由があるはずだと考えます。

服を縫う技術の修得は一部の子供達には非常に有意義ですが，すべての子供達に必要ではありません。すべての子供達に意義ある教育を提供する義務教育としての目的を考えると，モノ作りをする達成感や過程を学ぶこと，作っている人がいることを意識させるところに，家庭科教育の重きを置いているのではないかと考えます。今の家庭科教育の製作物が非常に簡単なものになったことを世間では問題視してますが，それは技術修得という側面からの意見です。「お魚は切り身の状態で泳いでいる」「麦茶はペットボトルにはいっているもの」と思っている子供がいるような時代に，モノができる過程やそれを作った人がいることを意識させるところに，義務教育の目的があると考えています。

専門性と多様性に対応できるICT教育

末弘　一方，大学は専門教育機関であり，義務教育や高等教育の目的とは異なるべきです。特定の分野の専門家を育てることが目的であり，自身の実習においても布や材料の知識を応用し衣服をデザインして製図することで，自分の思いどおりの服を作ることができる人を育成したいと思っています。ただ，その理想と乖離してしまうのが，大学までの家庭科教育が技術の修得を目的としなくなったために，全く服を作ったことがない学生に以前からの被服教育を当てはめることができないということです。2，30年前の学生と今の学生の入学段階での知識や技術にはかなりの差がある中，大学での被服教育では，同じレベルまで到達させようとしています。逆に，今はアパレルCADという新しい知識の修得も加わり，この理想と現実の乖離を解消することは難問です。その解消に繋がればと取り入れたのが，ICT教育です。すべてを理解してもらうための教育の充実を理想としながらも，その前に現実との乖離の隙間を少しでも埋めるための方法としてICT教材を用いています。

古濱　最新の教育システムを活用することで，学生が自ら知識や技術を高めることができるとても素晴しい教材だと感じています。学生の利用状況や効果は感じられますか？

末弘　私のICT教材は2011年に公開しましたが，当初は衣服の製図が課題でした。基礎縫いは大学までに多少は修得していますが，衣服の製図は大学でゼロから始まります。初めての内容であり，分数や計算，間違いを訂正する手間など細々としたことが積み重なり，製図嫌いになってしまう学生が多いのが現状です。これは他大学でも同じ状況です。教える側としても，当初は白板に手書きをしたものを再度説明するために書き直し時間と労力を要しましたが，PowerPointを用いることになったことで，遡って何度でも繰り返し説明ができるようになりました。その後，本学の学習管理システム（Learning Management System，LMS）でeラーニング教材を提供するようになりました。

古濱　教材への反応はどうでしたか？

末弘　困っていた人には役立ったように感じます。2013年に基礎縫いに関するICT教材の利用を開始した際には視聴者が少なかったのですが，コロナ禍では20数校の先生方から連絡をいただきました。自粛が厳しかった関東が多く，驚くほど視聴者も増えました。ただ，コロナ収束後はまた視聴者が減る可能性があります。コロナ禍以前の実習での授業方法を振り返ってみると，学生が教員を囲んで密集しながら説明を聞くことが当たり前でした。集まるメリットは集中して理解しようとすることですが，様々な人が世の中にはいるので，密集した時の対人距離が気になる人もいますし，密集した時の立ち位置によって理解度が変わることも問題です。

様々な局面で，今までのことが正しかったのかを自問自答することが多くなりました。その中で，ICT教育の活用は，全員が同じ説明を繰り返し視聴できる環境を提供できます。そこで，ICT教材の動画を用いながら直接対面で説明をし，授業後でも視聴できるようにしたところ高評価でした。ただ，教育方法として本当に正しいのかは今後も検証が必要です。1度きりの説明だからこそ，集中して理解しようと心掛けることで集中力を鍛える効果は確かにあります。

古濱　そうですね。多様な環境の学生がそれぞれにあったスタイルで学べる授業が今は求められていますので，良い教育方法ではないかと思います。

生き生きと自分が輝ける場所へ

古濱　学生の卒業後の姿や進路についてどのようなことを期待されますか？

末弘　自分自身がちょっとでも楽しいと思える仕事や，生き生きできるところで活躍して欲しいです。これから仕事をする期間は学生の時よりもずっと長く，働くことは非常に大変ですし，ずっと楽しい面白いと感じることは難しいので，少しでも好きであれば続けていけるはずです。教員になって欲しいという願望もありますが，自分が輝ける場所を見つけて欲しいですね。学んだことを融合していける応用力のある人であれば，どこでも活かせます。いわゆる「生きる力」「考える力」を強化しながら活躍して欲しいです。

古濱　いろいろな考えを持ち，様々な分野を目指している学生達に対して，とても心強いメッセージをありがとうございました。アパレルコースでは被服学コースの学びが不可欠であり，そのような関係性を学生に意識させることの重要性も強く感じました。本学科の今後の教育についても，改めて考える機会になりました。

――最後に，本学科の学科長であり被服材料を研究されてこられた澤渡千枝教授に，被服学コースの現状とこれからの生活環境学科についてお話しいただきます。

古濱　被服学コースの学びについて，先生が思っていることをお聞かせください。

澤渡　生活環境学科の中の被服学コースを上手くアピールできていないなと感じています。生活環境の中で私たちが手に触れたり肌に触れたりするモノや，生活空間を形成しているベースには様々な「材料」が関わっています。それら材料の特性を活かして，いかに上手く私達の健康や心地良さを得ることができるかを追求しているのが生活環境学科です。だからこそ，その出発点となる「材料」のことをよく知らなければ，活かすこともできません。それを上手く伝えきれていないように感じます。

図３　学科長の澤渡千枝教授と古濱裕樹講師との対談の様子

澤渡　料理に例えると，いかに美しい料理であっても味が良くないと美味しくないですし，食材の鮮度や産地，持ち味が活かされていないと料理の質にも影響します。見た目ももちろん大事ですが，食材の良さを知り活かすことで心にも身体にも栄養になる料理を食べることができます。被服学コースでは，生活に関わる材料の良さを知り活かすための授業をしているのですが，そのアピールが上手くできていないと反省中です。「被服学」という名称ではありますが，被服だけではなく様々なモノや空間を形成する「材料」について学ぶコースです。さらに，材料の知識だけではなく，材料を変えることで製品の性能や機能性がどのように変化するのかも学ぶことができます。

被服学から生活環境を考える

古濱　そうなると，コース名称も「被服学」ではなく「生活材料」の方が適しているのでしょうか。

澤渡　実はコース名称で全てを表すのは難しいのですが，生活環境の基盤を専門とするコースと言えます。

古濱　現在のカリキュラムでは，１年次に生活環境に関する基礎的な科目を開講しています。生活科学や同演習も開講していますが，これらの科目は全コースに関連する「材料」について，科学的に捉えることができるようになることが目的ですので，コース選択に関わらず履修して欲しいと思っています。

澤渡　そうですね。そのような学びによって，例えばカタログに掲載された写真だけで良い悪いと判断することなく，カタログに書かれている情報から実際の性能を予測してモノを選ぶことができるようになります。服を販売する店員であれば，似合うかどうかで販売するのではなく，着心地や耐久性，手入れの方法など服に関する様々なアドバイスもできる人になって欲しいですね。そのような能力は単に記憶しているから導かれるものではなく，やはり材料の知識があるからこそ適した情報提供ができますし，新しいものを作り上げる商品企画などの職種でも寄与できるはずです。そのような人を育てたいなと思っています。

古濱　同感です。プロダクトや建築，内装，インテリアなどもベースにあるのは「材料」であり，その質を保証し，質の良いものを目指していくということは大変重要なことです。生活環境学科ではそのための学びを提供し，本当に良いものを作る人材を輩出していくことが役割だと認識しています。現在の被服学コースでも，アパレル分野以外で通用するような学びができているでしょうか。

澤渡　基礎を知っていれば応用ができます。服について学んだとしても，基礎知識を活かし知識を道具として使いこなすことができてさえいれば，モノを扱い評価するどのような分野でも活かせます。これまでの卒業生もアパレル分野以外の様々な職種で活躍していますので，すでに実証されていると言えます。

古濱　被服学コースだからということで，必ずしもアパレルやファッション産業での活躍を期待しているわけではないということを学生にも知って欲しいですね。

澤渡　このように言うと他の領域を侵害するように感じる人もいるかもしれませんが，実は今の生活環境学科は被服学コースが起点になっています。以前の被服学科から，「被服を起点に生活を考えていく学科」として生活環境学科に変わりました。被服学コースが生活環境学科の学び全体に繋がっていると述べた前提には，このような歴史的経緯があります。

偶然にも先日，昭和 53 年度の卒業生が「住環境の消費科学的考察序説―被服学から生活環境学へ―」というタイトルで取

り組んだ卒業研究を発見しました。その学生は，家政学部被服学科の所属です。内容は「生活とは」「生活環境とは」から始まり，「被服学と建築学の相違」や「生活環境学としての住居」，そして「集合住宅」について考察しています。集合住宅での生活者が多くなり，そこで問題となった床衝撃音の対策として，緩衝素材や床構造まで丁寧に考察するだけでなく，それら材料と住環境の関係性にも着目して実験もしています。こういった学生の研究もベースになり，後々の生活環境学科が生まれてきたのだと感じました。

古濱　その卒業研究を発表してから 10 年以上も後になって生活環境学科に変わりましたので，先駆け的な研究で先見の明がありますね。

澤渡　そういった視点で広がっていった学科であるからこそ，被服学が生活環境を考える基盤になると言えます。ただ，今は服だけを学ぶと認識させてしまっていることが非常に残念です。

感覚を通して学ぶ被服学の重要性

古濱　服に関することを学ぶ学科も減少していますが，被服学を学ぶことが軽視されていると思いますか？

澤渡　そうは感じていません。いくら部屋の中の空調を整えたとしても，人は裸で生活することはできません。服は常に身体に触れ続けています。服から刺激を受けていますし，触れ続けているからこそ，スマートテキスタイルなどで患者の健康状態を常に主治医も確認することができるようになりました。服はただ単に身にまとうだけではなく，様々な機能を備えることができます。今は日常着から，動作を補助する特殊な服まで様々な服があります。今だからこそ付与できる機能もあり，服によって豊かなライフスタイルやサスティナブルな社会に貢献することもできます。服から考えることも服から生活を改善することもできます。ただ，その時に重要な役割を担うのが，服に用いる「材料」であることを忘れてはいけません。

古濱　社会や生活が変化する中で，これから本学科での被服教育はどのような方向へ進むべきなのでしょうか？

澤渡　常に高校生や社会の要望を汲み取る必要がありますね。ただ，それだけでなく，本学科で今まで見えていなかった世界や新しい視点に気づき，より良い生活環境の構築を提案できる人になって欲しいです。高校生にそのことを理解してもらいたいのですが，なかなか伝わらず難しい課題です。私達にも工夫することが求められています。人間は目に入ってくる情報は強烈に印象に残りますが，目に見えない情報の必要性をもっとアピールしないといけないのでしょうね。

古濱　視覚だけでなく，触覚など他の感覚を通して学ぶことの重要性ですね。

澤渡　感覚に訴えかけることができる面白さや新しいことを発見する驚きの重要性を認識してもらい，自身でさらに深く掘り下げたいと思ってもらうことで，ここで学んで得したなと感じられるような学科にしたいと思っています。

境界領域を越えて知る互いの良さ

澤渡　高校生からみると，アパレルや被服学というものの本来の姿はイメージし難いです。デザイナーなど目に見える状態に関わっている仕事はイメージしやすいようですが，それはほんの一部で様々な仕事が関わっていることを教育・研究の面から気づかせていくことが今後の課題だなと強く感じています。内容的に理学系や工学系も含まれますが，基本は「人」であり人の健康や安全，生活を考える学科なので，より身近なものへの興味から本学科に歩み寄って覗いてもらえれば，面白さに気ついてもらえるはずです。今は「覗いてみよう」という気にさせることが課題です。

古濱　社会の変化と共に人が求めるモノも変わってきました。

澤渡　高齢社会であることも注目すべき観点です。着る人も住まう人も多くのユーザーが高齢者になります。学科でも関連した内容を取り上げていますが，衣と住の両方からの学びが重要です。教員も専門・異分野での教員間の共同研究，協働もますますこれから必要になってくると思います。互いの分野や境界領域に踏み込むことで，学科内での教育や研究活動も活発化するはずです。もちろん，これ以上の負担がない状態で，風通しを良くしたいということです。そういった意味で，新しくできた本学科の生活環境 2 号館は授業や教員間も見通しの良い環境になっていると感じています。これを機会にして様々なコラボレーションが生まれることを期待しています。互いの良さを知っていくことが大切ですね。

人生にプラスになる生活の科学を学ぶ

古濱　学生に伝えたいことや期待していることは何でしょうか。

澤渡　自分の所属しているコースばかりに縛られないで欲しいですね。関連する分野にもっと飛び込んでいこうという意志も持って欲しいです。卒業研究でも同じように様々な専門教員にアクションを起こすことで人脈が広がり，違った視点が得られたりするメリットがあります。6 つのコースは「壁」で区切られているわけではなく，「窓」があり他のコースも覗き見る自由度がありますので，学科内で自由にコラボレーションできることが理想です。

古濱　以前から他の研究室を訪れて積極的に研究に取組む学生もいましたので，今後はより多くの学生が主体的に自身の研究を大きな視点で捉え，広く深く研究するようになることを期待しています。最後に，未来の学生となる高校生に向けてメッセージをお願いします。

澤渡　生活環境学科は，純粋な文学部ではなく純粋な工学部でもなく，あいまいであるが故に他にはない学びの視点が魅力です。ソフトな理学・工学的な側面と文学・歴史的な側面も兼ね備えながら，且つデザイン性・美しさという感性も磨くことができます。私達の生活に直結した様々なモノの基礎から応用まで科学的な視点で楽しく学ぶことができ，人生にプラスになることを専門的に身に着けることができますので，高校生の皆さんは身構えずに進学を検討してみてください。

古濱　本学科には，生活の科学を学ぶエッセンスがたくさん詰まっているということですね。ありがとうございました。